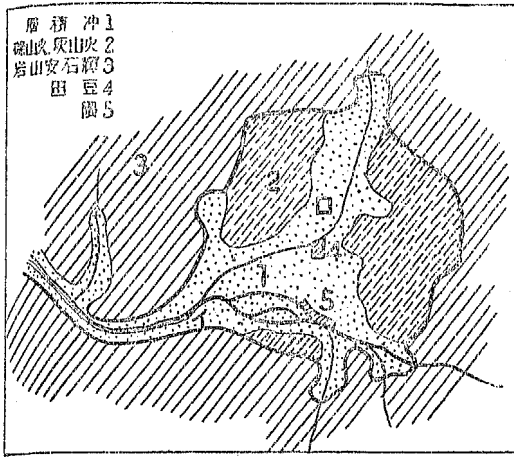


日田盆地の考察

中川和進

日田盆地は大分縣日田町を中心とする約二・

一、位置概形



第一圖 日田盆地地圖

五平方里の面積を有する低地で、西は福岡縣を去る一里、久留米市の東約十里、東は萬年由布等の火山岩地方を距て、遠く大分別府に對し北に英彦山南に阿蘇の噴煙を望む。一言にしてその位置を示すならば北九州の中心部に位し阿蘇火山帯の北部にあると云ふ事が出来る。

第一圖に於て太い黒線で圍まれた部分がそれであつて、その高度はイ點附近では七十米、ロ點附近では九十米を示し、周圍は三四百米の高度の高度を有する輝石安山岩を以てめぐらされ南北の最大徑約七軒、東西九軒に及び可成大きい陥落地である。盆地内部は筑後川の上流である三隈川及び支流花月川の作れる沖積平野と、東南北の三部に火山灰火山礫の堆積せるを認む

る事が出来る。

二、成因の考察

單に日田盆地のみを見る時は、此の部分のみ鍋狀に局部的陥落を起したものであらうと考へられるが、而かも一度眼を大にして附近一帯の地形、殊にその構造線を觀察するならば、局部的陥落であると速断することは出来ぬ。即ち僅か五籽の西方に位する彼の大規模な三群水繩の二大斷層線は、どう考へても盆地成因と全々無關係なものとは思はれない。

更に又詳細に各部につきその構造線をしらべて見ると、水繩斷層線と同一の方向を示せるものゝ中、河系のみにつきて見ても、花月川上流有田川、玖珠川があり、尙それと直角の方向をとる構造線、即ち水繩斷層線の副斷層線とも見るべきものに、大山川中流、寶滿川、小野川があり、三群斷層線と同一の方向を取るものに、

星野川、隈上川、筑後川池田下川間がある。その副斷層線と見るべきものに松末川、大肥川、朝日川、高瀬川、大山川支流がある。(五萬分一地形圖、甘木、久留米、吉井、豆田、耶馬溪、森、參照)

勿論此等構造線を以て直ちに水繩三群兩斷層と同一性質のものであるとする事は、或は早計であるかも知れぬけれども、その方向が殆んど全部、前二者に關係あるものゝみである事と位置があまりに接近してゐる事からして、その影響を受けたものと考ふる事は何等差し支へ無き事であらう。

又河系の外、コントロールの状態等皆水繩三群兩斷層線と關係ある事は決して偶然の事實として見得ない現象である。

故に日田盆地の成因としては小藤博士の所謂阿蘇水道中に噴出せる火山岩地方に前記二大斷

層の餘力が侵入し——幾多の裂線を生ぜしめ——ここに局部的の陥落即ち沈降運動を生じたものと見るべきである。

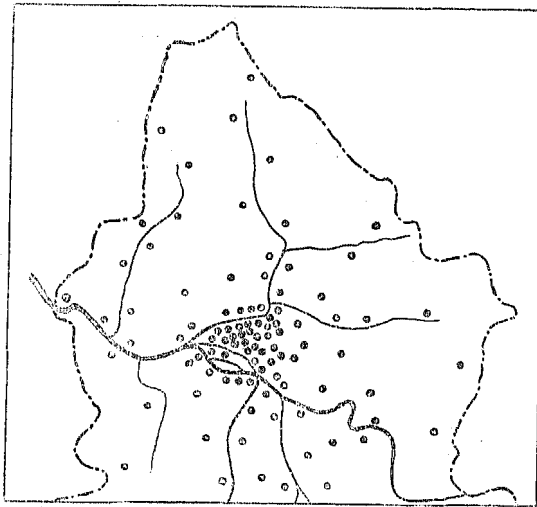
かくて現在の日田町を中心として沈降するや附近の水を集めつゝ一の湖を形成し、同時に阿蘇山麓の火山灰及び火山礫を運び來つて湖底に沈積し、一の湖底平原を生成し、その灰礫の層は漸次厚さを増すに従ひて水面は昇り、遂に杷木の狭流を浸蝕し初めて一大排水口を作り出し且つその排水口は次第に低下し、それにつれて湖水面も下り、此處に湖は老年期に入りて死滅するに至つたのである。

火山灰火山礫を以て埋められたる日田湖が死滅するや、それ等沈積物は再び河流の爲に、下流に運び去られてその後には沖積平野を作り、僅かに河道に當らなかつた部分のみが運搬せられずその沈積物を残してゐるのである。(第一圖參

照)。

三、人文に及ぼせる影響

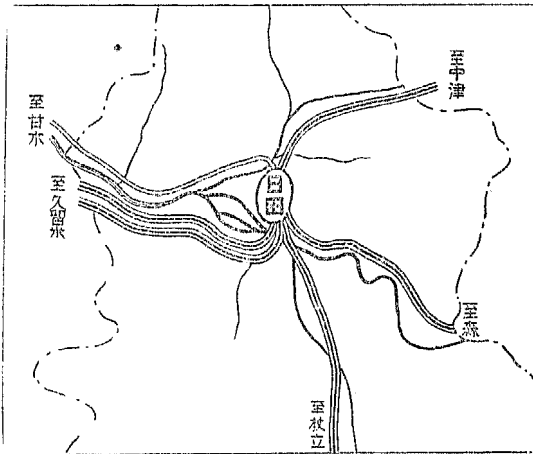
次に日田盆地に於ける自然と人文との關係につきて見るに



日田盆地附近人口分布圖 第二圖

若しも水繩三群兩斷層の影響がなくて日田盆地が出來てゐなかつたなら、附近に人を誘致する丈の何等の力をも有しないこの地方は、とても現在の如き人口密度は來さなかつたであらう。即ち盆地内の人口密度は一方里につき一萬一千で日本

内地の平均密度二千四百二十五人の約四倍半に相當し、尙盆地北方の小野村が面積二、〇六方に對し人口二千八十五人で一方里約千人足らずの割なるに較ぶれば約十倍の密度を有するのである（第二圖參照）。



第三圖 自動車系統圖

交通も同様、若しも盆地の生成がなかつたならば、自轉車を通じ得、道路より出來なかつたであらう。然るに自轉車はおろか、自動車も盆地を中心として八方に通じ、その定期に走るもののみを見ても西は久留米に十二回往復、甘木に五回

日田盆地の考察

東は森に六回、南は熊本縣杖立に六回の往復をなしてゐるのである（第三圖參照）。

教育機關につきては、中學校女學校農林學校工藝學校等、山中の一郡なるにも闕らず、縣立中學校四校を有する事は、教習縣を以つて誇る福岡縣も、一步を譲らざるを得ない状態にある。

産業に及ぼせる影響も、熔岩臺地であつたならば僅かに薪炭を産する位ひのもので、大して人類に寄與する所がなかつたであらうが、かなり廣い沖積平原を有するを以て、米麥の産額は約二百萬圓に及び、その分布状態も第二圖人口分布圖と同一のタイプを示してゐる。

四 日田町の考察

吾人は單に日田町と呼んでゐるが、行政上の日田町は實は豆田、隈の二つの部分から成立したものであつて、然かも其其等二つは、各々異なる形態と機能を有する事は注目すべきである。即ちその形態は第一圖にある如く、豆田は南北に長邊を持つ長方形なるに反し、隈は略東西に帶狀をなし北に尾を有するトンボ型をなしてゐるのである。此の現象は前者にありては主として舊城下町（慶長六年小川壹岐守光氏月隈山に築城）として發達したるを以て整然たる形態をとり、後者にありては舟運の便ある三隈川、及び道路に支配せられて以上の發達をなしたるものと思はる。

機能に於ても前者は何等見るべきものなく僅かに城下町として面影を存するのみで、既に老年期に入れるに反し、後者

は商業交通上の中心地をなせると共に、三隈川一帯は鎮西の小京都とも稱せられ、一の遊覽地をなし、旅館多、流に沿

ひ建ち並び、一般に活氣を呈し青年期にあるものと云ひ得るのである。

遠州濱名湖の歴史地理學的考察

佐 々 木 清 治

緒 言

で論及する積りである。

一、本邦描圖法發達史上に

於ける一貢獻

濱名湖は地理學上恰好の實習場であると云ふ見地から斯學のあらゆる分科に亘つて此の湖を研究することは興味のあるものである。湖畔佐濱即ち湖東三方原一帯は地球第一卷に於て槇山助教授の古生物學並に層序學的研究があり、湖水の成因に關しては恩師辻村先生が其著『地形學』に於て述べられてゐる。湖沼學的方面の檢討は他日の機會に譲つて本稿に於ては主に歴史地理學的立場から此の湖を観察しやうと思ふ。

即ち往古に於ける描圖法の特相より始めて、地形の變遷を述べ、尙進んで歴史交通地理によ

で論及する積りである。

一、本邦描圖法發達史上に於ける一貢獻

濱名湖に關する文獻蒐集中余は最近偶然にも古地圖の寫本を手に入れた。この地圖は空海の手作であると言はれる。空海は嵯峨帝の御代濱名淡海を探勝されたのである。寫本の儘を記載すると

遠江濱名淡海圖

(上略)外院ニ吳松、廣浦ハ爲ニ青龍ト智婆、長岳ハ

爲ニ白虎ト東海ノ大道ハ爲ニ朱雀ト贗代ノ高山ハ作ニ

玄武ト隣徒悉泳ヲ思ニ四大海ノ翼類咸ク翔ヲ疑ニ八